



日本福祉大学大学院

「緊急時に現れたモンスター ～それはモンスター？～」

監修:日本福祉大学大学院 ケースメソッド研究会

原著者:花岡 志泰

5

放海精神科病院グループ

放海精神科病院(以下、病院)で 30 年あまり看護師として働く草川は、主任としていう現場をまとめる役割を担っていた。4 年前からは、慢性期閉鎖の精神病棟に配属されている。

- 10 放海精神科病院は医療法人が経営しており、554 床の病院を中心にクリニック、訪問看護ステーション、就労継続支援 B 型事業所、グループホーム、相談支援事業所、精神障害者地域生活支援事業がある大きな組織である。

昭和 27 年に創立以来、地域に根差した質の高い精神科医療を志ざし、「誠実で開かれた医療を行い、地域に貢献します」という病院理念をもとに医療を提供している。草川が所属

- 15 する看護部は、「患者様の個性や尊厳を尊重し、敬意を持って接すること」を理念とし、患者様の人権を守り、安全で安楽、安心して療養できる看護を目指すこと、また医療チームの一員として、他職種との連携を図り、ベッドサイドから地域へ継続的ケアを提供すること、そして、専門職として適切な判断、技術を養うため、自己啓発に努めることを目標に掲げている。

20

放海精神科病院 看護部

看護部に所属する看護師は 172 人おり、看護部長を頂点に副部長、そして各病棟の師長

と主任・看護師スタッフで形成されている。看護部には、教育委員会や研修委員会、事故対策委員会などの委員会と共に、感染対策委員会が設置されている。

病棟は機能別に分けられており、9 病棟がある。看護師は外来やデイケアの担当を除くと、各病棟に平均 18 人が配属されている。

5

慢性期閉鎖の精神病棟

草川の配属されている病棟の定床は 48 床で、患者の平均年齢は 68 歳と高齢である。患者の 8 割が統合失調症を患っており、慢性期の状態である。病棟には看護師が 17 人配属されており、経験年数 4 年以下の 20 歳代看護師が 3 人と、この病院での経験は 2 年目の 30 代の看護師 1 人、そして経験年数 20 年以上の 40 歳～50 歳代の看護師 13 人で構成されている。このように若手とベテラン看護師がおり、その間をつなぐ中堅看護師が配置されていないのが現状である。

10

新型コロナウイルス感染症のクラスター発生

15 今年の初夏、慢性期閉鎖病棟に新型コロナウイルス感染症によるクラスターが発生した。一昨年、国内で初めて感染者が発見された後の第 1 波から続く第 7 波の時期だった。第 7 波は、これまで以上の波を上回る感染拡大が生じたものの、重症患者の数は、第 3 波、第 5 波、第 6 波と比べて少ない傾向にあった¹⁾。

20

病棟では、患者と看護師の 8 割が感染し、病棟の責任者である初竹師長までもが感染してしまい、現場の指揮をとることのできる者が不在となった。主任の草川は看護師長に代わり、病棟に応援に来た感染対策委員会と緊急会議を行った。

当病院の感染対策委員会は、新型コロナウイルス感染症が発生する前からマニュアルを作成はしていたが、病棟の区域分けは各病棟に任せており、感染症対策のポイントも示していなかった。また、各病棟の備えの確認や感染症発症時のシミュレーションも行っていなかったため、新型コロナウイルスの感染が生じてから、常に病棟も感染症対策委員会も慌ただし

5 く混乱をきたしていた。

今回の緊急会議では、現状の報告と今後の対策について話し合われた。具体的には、二次的な感染拡大を予防することを目的に、検温方法を決めて新たな感染者を早期発見することの徹底と、新たな感染者が発見された時のゾーニングの方法など対応策の決定であった。

会議の終了後、草川は全スタッフに対して、感染予防に関する業務手順を時系列に整理し、

10 伝わるように掲示した。

クラスター発生時の病棟

コロナウイルスが感染拡大してから、看護師はガウンテクニックが必須であり、ガウンや帽子、N95 マスクを着用し、何重にも手袋をして患者対応を行っていた。また患者と接する時間や接触回数も制限し、ナースステーションに戻ったときには、毎回ガウンを手順通りに脱ぎ捨て、全身をアルコールで噴霧し消毒をしていた。

15

患者の食事は、ディスポーザブルの食器や使い捨ての割り箸、紙コップで提供し、トイレで排泄できない患者の排泄物は、感染性の医療廃棄物として取り扱っていた。

20 こうした混乱が続く慢性閉鎖病棟で、いろんな患者が療養生活を送っていた。

77歳の及川さんは、この病棟に来る前に新型コロナウイルスに2度感染し、移動して来られた。そのため新しい環境に慣れず他患者への干渉が増え、薬剤の調整を行って対応することもあった。また毎日、感染エリアと非感染エリアを無視して自由に動き回っていた。

5 神田さんは、昭和46年に統合失調症と診断されて以降、14年以上この病院に入院されている。いつも他の患者との交流はなく、「コーラやエンシュアが欲しい」と言った自分の要求が通らない時は、要求を繰り返し不安定になる。

昼夜問わず、ホールの自分の指定席で過ごされており、この病棟にクラスターが発生しても、その習慣を変えることはなかった。そのため、これ以上感染者をださないよう部屋に戻ってほしい看護師と神田さんの攻防は続き、あまりに注意を受けるため、神田さんは怒りだすことが増えた。

10

新型コロナウイルスのクラスターが発症し、いつもと違う病棟の様子に職員たちだけでなく、患者たちも不穏になっていた。この病院には、草川が就職する前から入院している患者たちが多く、それぞれが統合失調症などの病気を抱えながらも、ここでの暮らしのスタイルができていた。しかし、それが新型コロナウイルス感染拡大によって崩されていた。

15

3日後のある日

4月にこの病棟に配属されたベテランの平上看護師が、決められていた手順とは違う方法で検温を実施していた。それも、病棟に応援に来てくれたスタッフを巻き込みながら・・・。

20 草川が、コロナウイルスに感染した患者の対応に追われるなか、感染対策委員会と懸命に決

めた検温方法である。

平上看護師が行う検温方法は、午前中に全員の検温を行わないものだった。そのため、新たな感染者の早期発見にはつながらず、それだけでなく二次的な感染も防止できなかった。

それでも平上は我流の検温方法を平然と続け、現場の混乱はさらに大きくなっていった。

5

	決められていた検温方法	平上看護師が行った検温方法
午前	9時に全員の検温を行う	9時に陽性者の検温を行う
午後	14時に午前の発熱者と陽性者の検温を行う	14時に全員の検温を行う

新型コロナウイルスに感染し復帰したスタッフも、この平上の言動に振り回されて大騒ぎとなっていた。復帰したベテラン看護師からは、

「いつから業務が変更になったの！！！！！！」

「業務が変わったのであれば、知らせてくれないと困るじゃない！！」

10 と切羽詰まった意見が続出した。

こうした対応に草川が頭を悩ませる中でも、相変わらず平上看護師は我流で検温を行い、病棟の混乱には我関せずであった。

『いつもそう・・・この病棟には、我流の看護を行って誰の言うことも聞かないベテラン

15 看護師がいる・・・言い訳ばかりして！』

草川は、感染防止の備品を整理しながら、つぶやいた。

『精神科の患者は、どんなケアをしても文句は言わない。それをいいことに・・・』

いつも思っていたことがマグマのように吹きだした。しかし、自分が愚痴を言っている場合ではない。

『いつになったら、この状況が落ち着くんだろう・・・もう・・・』

5 草川を奮い立たせたのは、看護師としての責任感と患者への思いだった。草川は、社会の偏見や差別に今も苦しむ患者たちとの日々に、やりがいを感じていた。

長年、家にも帰られず病院で生活する患者たちが、日々、何気ない楽しみを見つけている様子を目にすると、ここがあってよかったと安堵する。しかし今は、そんな心のゆとりは全くなかった。毎日を乗り越えるのがやっと、病棟だけでなく、病院全体がキリキリとした雰囲気

10 気に包まれていた。

『他の精神科病院はどうしているのだろう』と、ふと頭をよぎったが、他の病院がどうしているかなど知る術もなかった。インターネットで調べれば分かったのかもしれない・・・しかし、そんな余裕は全くない。もしかしたら、病院の管理者は、地域のネットワークを駆使

15 して感染対策を検討していたのかもしれないが、接触する機会も限られる中で、そうした話を共有することもできなかった。

どうしよう・・・

草川は備品の整理を終えると、まず病棟内の伝言板や電子カルテのメール機能を利用し

20 て、病棟スタッフに「検温方法は変更していません。新型コロナウイルス感染症発生時から

行っている方法で行ってください。」と通知した。

そして、朝の申し送りで、「新規感染者の早期発見と二次感染の予防のために、9 時に全員の検温を行ってください。そして 14 時に、陽性者と 9 時に検温したとき発熱していた患者の検温を行ってください。」と伝えた。

5 その結果、一時的に混乱は終息した。

それでも、草川が勤務していない時は、平上看護師は我流の検温方法を継続していた。

平上看護師は、カンファレンスなどでは、「分かりません！知りません！教えてください！」

と平身低頭ではある。しかし、研修会に出席すると、様々な質問を講師に投げかけて、講師

10 が困ってしまうことも多かった。

だが、平上看護師はベテランのなかでも最年長者で発言力があり、実習指導を率先して実施することや新たな看護技術を工夫して発信するという一面もあった。

草川は平上看護師の仕事に対して認めている部分もあった。

15 しかし、思い込みや自分の考えで勝手に業務を変更してしまうのは、やはり放っては置けない。看護師は一人で仕事をするわけではなく、病棟チームが一つになって仕事をすることはベテランだからこそ、わかっていなければならないはずだ。

『この病棟では、中堅層が配置されていない・・・だから、若手とベテランのつなぎ役がいなくて、若手スタッフが委縮して意見も言えない。だけど、いつも人手不足・・・とても贅

20 沢も言っていられない・・・』草川の心はざわざわと波立っていた。

初竹看護師長は、自分の新型コロナウイルスの後遺症と、家族の感染で当分は出勤して来られないそうだ。

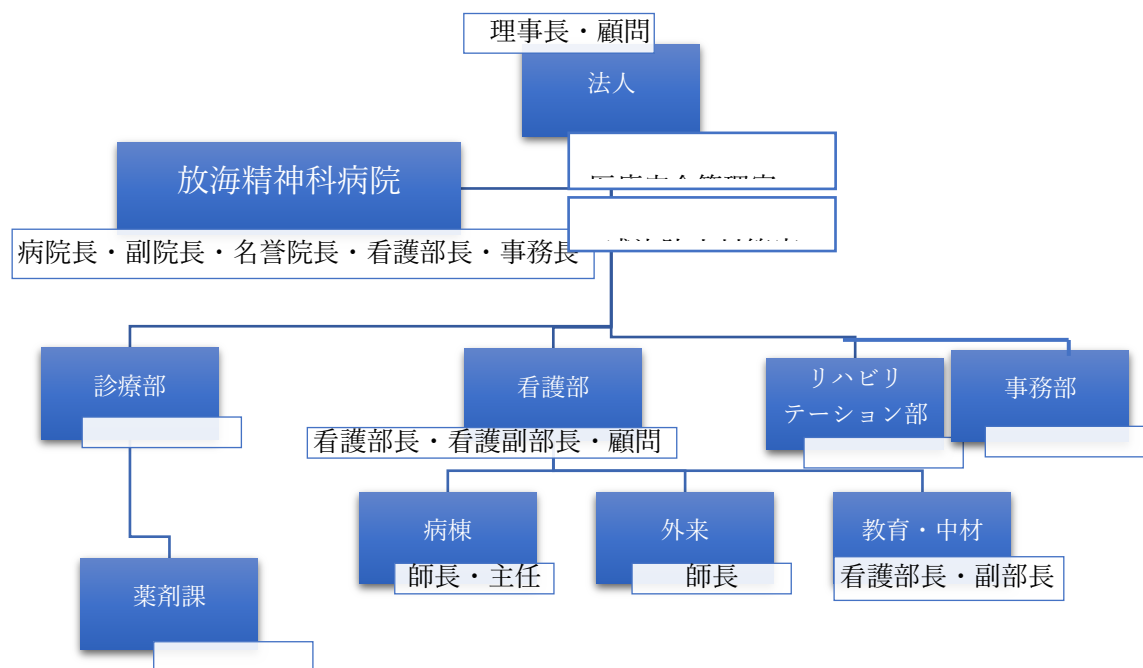
この状況はおさまりそうもない・・・どうしたらいいのだろうか。

5

10

15

添付資料 1—組織図(簡易版)



引用文献：

- 5 1) 厚生労働省「新型コロナウイルス感染症アドバイザリーボード（2022.11）」

<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001010896.pdf>

不 許 複 製

監修：日本福祉大学大学院 ケース教材委員会
